

外傷性後脛骨筋腱脱臼の一例

○小谷 悠貴 (こたに ゆうき) (MD)¹⁾, 田中 美成 (MD)¹⁾, 五島 篤史 (MD)²⁾,
天野 大 (MD)¹⁾, 北 圭介 (MD)¹⁾

¹⁾ 大阪労災病院 スポーツ整形外科

²⁾ りんくう総合医療センター 整形外科

【目的】

後脛骨筋腱脱臼は足関節骨折に伴う報告が多く、単独損傷例の報告例は少ない。今回、後脛骨筋腱脱臼に対して、支帯形成術を施行した症例を経験したので報告する。

【症例】

症例は41歳男性。柔道の稽古中に右足で技をかけ、左足で踏ん張った際に左足に違和感が出現し脱力したために近医受診。受傷3か月後当院紹介初診時には、足関節の可動域制限はなく、疼痛・熱感も認めなかったが、足関節の自動背屈・内反時に後脛骨筋腱が容易に内果に乗り上げ脱臼を生じた。後脛骨筋腱脱臼と診断し、支帯を縫縮し pull-out 修復する支帯形成術を施行した。術後は3週間のギプス固定を施行し、3週より可動域訓練および装具を装着下に部分荷重を施行し、術後5週で全荷重を許可した。術後3か月でランニングを許可し、術後9か月時点で柔道にも復帰し、可動域制限および脱臼の再発はなく経過している。

【考察】

後脛骨筋腱脱臼はその原因から外傷性と非外傷性に分けられ、外傷性では足関節を底屈・内返しする際に大きな力が作用すれば伸筋支帯が破綻すると報告されている。発生頻度が低いために、後脛骨筋腱脱臼の診断には時間を要することがある。また、手術術式は腓骨筋腱脱臼に対する手術と同様に、支帯の縫合、骨ブロックを併用した支帯修復、骨膜下に後脛骨筋を通すといった方法があり、どの治療法も短期的には成績は良好であると報告されている。

【まとめ】

外傷性後脛骨筋腱脱臼の症例に対して支帯を縫縮し縫合する支帯形成術を施行し、短期的には良好に経過している。